

故石田氏記念の北斗医学賞、初回受賞は仙台の渡辺医師



渡辺王志医師

東北の若手ウイルス研究者の功績を顕彰しようと、財団法人仙台微生物研究所(仙台市)が設けた「石田名香雄記念北斗医学賞」の第1回受賞者に、国立病院機構仙台医療センターの渡辺王志医師(45)が選ばれ、8日、仙台市で授賞式が行われた。

渡辺医師は、かぜの原因で検出が難しかったパラインフルエンザウイルス4型の検出技術を確立。感染症状は「鼻風邪程度」とされていたが、気管支炎など小児の重症化の一因になっていることを明らかにした。

渡辺医師は仙台、山形両市で2003年から6年間にかぜの症状があった0～15歳の計約1万6000検体を調べ、うち0.8%で同ウイルスを分離検出したという。

青葉区のホテルで開かれた授賞式で、選考委員長を務めた浅尾裕信・山形大医学部教授は「優れた研究だ」と称賛。渡辺医師は「ワクチン開発などに貢献できるよう研究を続けたい」と話した。

賞は、研究所の前理事長で09年に死去したウイルス学者で元東北大総長の石田名香雄さんの功績をたたえようと創設された。微生物学や免疫学などで実績を上げた50歳以下の研究者が対象で、8月の日本細菌学会東北支部総会で発表された37件が候補になった。

今後も年1回の選考を行い、10月に表彰する。

2011年10月09日 日曜日